

日付:2015年9月6日／聖書:出エジプト記32:1～14

主題:「人を見るのか、神を見るのか」

イスラエルの民があのかのエジプトでの過酷な労働、奴隷扱いされていた状況から、神の不思議な御業によって救出され、荒れ野を旅して三月目が経った頃である。シナイ山のふもとに民を残し、モーセは一人シナイ山に登った。四十日四十夜の間である。民は、モーセが帰ってくるのを今か今かと待っていた。しかし待ちきれない民は「金の子牛」を造り「エジプトの国から導き上った神々」とした。何故なのか？ 民がいつも簡単に偶像に走ってしまったのは…。

民は、これまでの数々の恵みを、御業を、モーセの業として見ていた。目に見えない神を神とすることを忘れて、モーセという人物に、神の像を描いていたということであろう。もちろん民は、「主よ、神よ」と祈るものだが、しかし目に見える存在が、偶像化してしまっていた。目に見えるモーセが見えなくなった以上、目に見える新たな像を作り上げてしまったということである。目に見えない神よりも、目に見えるものに寄り添う民の弱さが浮き彫りになったわけだが…。

イスラエルの民はだらしない、信仰のかけらもない民である。しかし、私たちはこの民を笑えるか？ 教会は神を礼拝し、神を崇めることを長年してきたが、教会は本当に見えない神を信じて来たのか？ 歴史的に見るならば、余りにも神を神としない現状が見えてくる。第二次世界大戦時に教会は戦争に勝つように献金を捧げ、祈りを捧げてきた。それは日本だけでなく、ドイツ、アメリカでも同じで、国家に服従し、積極的に戦争に貢献した。このことは、教会が見えない神を神として、信仰に立っているとはいえない。

神は偶像に走る民に怒り、滅ぼすと言う。しかし、その神の怒りを鎮めようとモーセは執り成しの言葉をかける。今日、教会の罪に対する神の怒りを誰が鎮めているのか。M.L.キング牧師の言葉に悔改めを持って聞いていきたい。

「教会ほど、妥協するという悲しむべき傾向がはっきりする場所はない。教会はこれまでしばしば、いろいろな型の多数意見を具体化し、維持し、祝福さえするために役立ってきた。教会がかつて、奴隷制や人種差別、戦争、経済的搾取などを是認したことは、教会が神の権威よりもこの世の権威に聞き従ってきた事実の証拠である。教会は、地域社会における道徳の守護者となるよう召されているのに、時々、不道徳で非倫理的なことを保護してきた。社会悪と戦うよう召されているのに、ステンドグラスの窓の中で沈黙を続けてきたのだ」(『汝の敵を愛せよ』)。

教会は今一度、この世の闇、痛みの中で聖書の言葉を聞き、神の声に押し出されていきたい。それが、神を見る教会としての歩みとなろう。(神谷)